

生花苗沼オートキャンプ場とセキレイ会について

さたけ・まさあき
1956年、徳島県生まれ。十
忠類村歯科診療所所長。自然を
勝太平洋岸湖沼群の自然を
考える会（通称セキレイ
代表。

佐竹正明

本文のねらい・要点

オートキャンプ場、木道、サイクリング道
路といった「三点セット」の安易な、自然に
親しむ施設が流行しています。南十勝でも、
タンチョウの生息地に、オートキャンプ場が
新たに建設されようとしています。自然愛
好団体「セキレイ会」結成と、そのとりくみ
に関してのレポートです。

セキレイ会結成まで

十勝の太平洋岸には数多くの湿地や湖沼があり
ます。特別記念物のタンチョウをはじめ数々の動
植物が生息しています。又、農業、林業、漁業な
ど人間生活に欠く事の出来ない必要な生産基地で
もありません。そして、多くの人たちがここに来て
野鳥を観察したり、山菜をとり、魚を釣り、余暇
を楽しむ学術上の貴重な研究も行われています。

私達もやはりこの地で色々な遊びを楽しんでい
ました。自分達なりに自然とふれあい有形無形の
恩恵をうけてきました。もちろんこの地域だけで
なく色々な所へ出掛けて行って楽しんできました。
しかし、同好の志が集まって出る話は、最後には
決まって「昔はもっと良かったのに……」という
言葉がでます。私自身、よく通って釣果もあがっ
た場所が一年振りに行ってみると眼を射るような
鮮やかなコンクリートの水路（三面護岸）に変わっ
ていて、落胆を通りこして怒りまで感じたことが
あります。その河川が種々の産業や農業に必要な
ことはわかっていますが、ここまで徹底しなければ
ならないのか？ 川やその周辺の林に対しての悪
意すら感じることもあります。セキレイ会の結成
の発端は、こんな所から来ています。動機は全く

単純なものです。「もっと魚を釣りたい」言い換
えれば、伝説の中にかいなくなつた大魚をもう
一度蘇らせたいということかも知れません。

釣り人がこんなことを考えるのと同じように色々
な立場の人が、そう考えていることでしょう。

しかし、その反面、川に橋が架かり、道路が出
来て便利になつたのもたしかです。そしてそれは、
本来、生活や産業に必要性があつて作られたもの
であるはずで、その恩恵を我々も受けているわけ
です。しかし、その周辺の生態系を根こそぎ破壊
してしまふような作り方で本当にいいのでしょうか？
ただ単に魚がいなくなつた、植物や昆虫の
分布が変わつてしまつたというだけで済まされな
い事があるように思われます。よく「ワイズユ
ース」という言葉を聞きますが、これを一時の経済
効果で、人間の都合だけで開発してしまふと、そ
れを復元するには、膨大な時間と莫大な費用が
かかります。そして、人間の手でその周辺のパ
ラメータを大きく崩してしまふと、いつかはそのツケ
が人間に回ってくるでしょう。一時的には利益を
生み出せても何十年か後にとんでもないことが
起こり得るのです。山が荒れてくると、最後には、
日々の食料や生活にまで大きな影響を与えるでしょ
う。日本国内だけでなく世界中で食料の供給がう
まいくなくなつた時、やはり国内で食料を自給
すべきだと気が付いたとしても、荒地しか残って
いなかったとしたらどうするのでしょうか？

「ワイズユース」とは、自然を全て経済効果に
置き換えて利用することではなく、生物の多様性
だけでなく、その周辺の環境の多様性を、持続可
能な状態に維持していく事ではないでしょうか？
又、利用も持続的に出来るように考える事だと

思います。自然愛好家は、単に自分達の遊び場がなくなる事だけでなく、その先にあるものを本能的に(?)危惧しているのだと思います。直接に利害関係がないためにかえって見えてくるものもあると思います。

セキレイ会は、地元の自然をもっとよく知ろうとして出来た集まりです。会員には、釣り人、ハンター、バードウォッチャーだけでなく、ごく普通の人々が集まって来ています。活動のほとんどは観察会が主になりますが、この貴重な自然を(周囲の産業、人間生活まで含めて)子孫にまで、残していく為にも、必要な提言をしていこうと思います。

なぜオートキャンプ場が必要なのか?

以上のような理由で、同好の志が集まって観察会の準備をしている時に、大樹町が生花苗沼にオートキャンプ場を造成しようと計画しているのを知りました。以下今までの経過を書き出してみます。

昭和四八年

平成 七年 八月

萌和林地整備

普通林地整備計画に基

づき萌和林地の舗装工事にもない周辺の計画が具体化してくる。

平成 七年 十月

平成 八年 三月十四日

林野庁事前ヒヤリング

事業計画を申請

四月二十日

セキレイ会第一回観察会

五月 十日

林野庁から町に対して採択決定

五月三三日

知事から町に対して採択決定

平成 八年 六月 五日
セキレイ会正式に発足

六月十三日
大樹町に対してオートキャンプ場中止要請

七月十二日
雁を保護する会が町に要望書を提出。町が再考方針を固める。

七月十九日
道の現地調査、中止に

七月十九日
対する理解を示す。

十月十四日
町に対して今後の計画

十月十四日
について要望を伝える。

十月二十七日
セキレイ会で生花苗沼

周辺現地調査。

十一月十一日
今後の施設について町

十一月十一日
に要望書を提出。

十一月十七日
生花地区農家との懇談

十一月十七日
会。

平成 九年 一月三十日
林野庁ヒヤリング

二月 五日
林業地域総合整備事業

計画最終案まとまる。

オートキャンプ場から

野島観察施設への変更

決定。

二月 六日
大樹町よりセキレイ会

に対しての説明がなされる。

現在、大樹町では今後の施設について、設計会

社に依頼して計画の最終的な検討に入っています。

これまでの、一連の流れの中で気が付いたこと

は、

① なぜここにオートキャンプ場をつくらうとし

たか? その必然性がないのに、計画がなされ

ようとしたこと。

② セキレイ会が結成されるまで、地元の漁業者や住民がほとんど知らなかったこと。

つまり言い換えれば、萌和林地を舗装すること

によって、それに付随する計画と補助金を利用して

カムイコタンキャンプ場を整備しようとしたのは

はわかるとしても、「事のついで」のようにオート

キャンプ場を役場内で発案して、それを直接関係

のある漁業者や地元の住民にはほとんど、はかる

事なく、なれば水面下で計画が進んでいたとい

う印象を受けます。農林課課長さんが私達の要望

に理解を示していただき、町としても当面の方針

を変えていただいたことは、幸いでした。おそら

く、この計画だけでなく、日本中で同じようなケ

ースがあると思われまます。計画が公にされた時には、

すでに決定事項であって、予算もつき、あとはゴー

サインを待つだけということになっているのでしょ

う。この時点で計画に対して要望をしても多少の

修正はしても、行政の流れとして、あとは根本的

な見直しもせずに進んでいく事になるのでしょう。

日本の行政システムがこうなっているのです。

オートキャンプ場から自然観察施設へ

生花苗沼周辺は、十勝でも数少ない貴重な自然

を持つ地域です。これを少しでも後世へ残すのは、

我々の役目でもあると思います。

セキレイ会としては、できれば何も作らないで

ほしいというのが正直な所でありました。なぜな

ら、ここにオートキャンプ場を作るということは、

一、シーズン中でもあまり気候が良くなく、まし

て、通年通して利用者はほとんどないと思われ

ること。

二、オートキャンプ場が出来ることで、ゴミや、

鯉の密漁等がかえって悪い点が心配されること。
三、周辺はタンチョウやオジロワシ等の棲息地でもあり、これらに影響を与えることは、必須であると思われたこと。

以上のことから、セキレイ会としては中止をお願いすることになりました。

しかし、すでに生花苗沼の林道は舗装工事が終了してしまっていることで、これはオートキャンプ場を前提としている為、ここに何も作らないわけにはいかないというのでした。それなら多くの人に通年通して利用してもらえ、また、周辺に影響をあまり与えない形の自然観察施設を提案したわけです。担当者の理解や新聞報道、専門の方達のバックアップもあり、大樹町も方針を転換することになりました。ただ施設といっても、色々な考え方があり、その外観や内容が本来の目的とかけはなれてはいけなさと考え、具体的な内容まで提案することになりました。

平成九年度以降、予算づけがなされ、実際に工事が終了するのは、平成十二年度になります。その工事方法やその他の管理も含めて見守っていきたいと思っています。

これからの課題、その他

セキレイ会が結成されて一年もたっていないのに、不十分とはいえ、ここまでの事が出来たのは、会員はじめ多くの人や団体の有形無形のバックアップや、行政の理解のたまものだと思います。この場をお借りしてお礼を申し上げます。しかし、反面たった半年余りで、現在の日本の状況が今まで以上に、よく見えてくるようになりました。特に自然保護団体というものに対する行政の担当者や

住民の人々のほとんどのイメージは、

一、都会から来て、住んでもいいのに、外部から好き勝手な事を言う連中。

二、町、村民でもないのに、行政に注文を付けるけしからん連中。

三、住民生活や地元の経済よりも、鳥や動植物が大切だと思っている連中。

四、自分達も文明の恩恵を受けているのを棚にあげて、地方の人に自分達の趣味の為に不便を押しつけて、きれいな事ばかり言っている連中。

おそらくこんなものだろうと思います。又、どこの誰が言っているのかわかりませんが、意図的に悪評を流しているフシもあるようです。自然保護団体と地域住民が理解しあい協力する事で、だれか不利益をこうむる人がいるでしょうか？

確かに一般に住民の人達にとって、よく内部のわからない集団なので、先入観や人づての風評だけで相像する事が多いかも知れません。まるでオウム真理教のように危険な団体というイメージが作られているように思います。

これからの自然保護団体は、自分達の意見だけを述べないで（それが全く正しいと思われても）一般の住民の人たちに理解していただけるような活動をしていかないと、今までに作られたイメージを消す事が出来ないように思います。行政と自然保護団体との間に住民が取り残されている状況が多くあるように思います。かえがえのない自然環境を後世に残すのは、一部の自然愛好家の為ではなく、結局は住民の為にもなるはず。この点では、だれもが一緒に話が出るはずだと信じています。

今後とも、皆様のご指導やご助言をよろしくお

願います。

